

男子プロテニス選手育成に関する成功要因に関する研究 ー世界ランキング100位以内日本人選手の大学における育成ー

トップスポーツマネジメントコース
5006A326-7 坂井利彰

研究指導教員： 平田竹男教授

現在、日本男子テニスは混迷を続けている。世界ランク自己最高 46 位を記録した松岡修造氏の引退以降、世界ランクトップ 100 に入る日本男子選手が育っていないのが現状である。しかしながら、世界における男子テニスがもの凄いスピードで進化していることを理解しなくては行けない。そのような環境下において、私はプロテニス選手として活動をしてきたが、その自ら歩んできたテニス人生を振り返り、様々な角度から男子プロテニス選手の選手育成における失敗及び成功を検証し、日本国内においていかなる世界ランクの選手を育成することが可能であるのか、いかなる育成方法を取れば国内における選手育成が可能であるのか、限界と可能性を明らかにしたい。また、日本における世界ランクの選手を育成することが可能である場合には、大学における育成にいかなる意義が認められるのかについて検証したい。それらの検証をもって、今後の日本男子テニスの選手育成に関する提言としたい。

本研究では日本人選手がトップ 100 に入ることが出来ていないという現状で、いかなるタイプの選手に対してしかるべき育成方法を提示することでその目標とするランキングを達成出来るかを明らかにすることを目的とした。

第二章では、本研究の研究手法として、選手の成長タイプを早熟型・晩成型、日本人選手か海外選手かの4種類に分けた。(1. 早熟型の日本人選手、2. 晩成型の日本人選手、3. 早熟型の海外選手、4. 晩成型の海外選手)

その中で、2. から4. の3種類の選手を事例研究としてインタビューにより掘り下げた。自分自身の例も分析に加えた。

さらに、育成システムにおける世界最先端育成システムやコーチの状況について、インタビューや文献を用いて、事例研究を行った。

これを受けて、第三章では抽出した各選手の育成過程の事例研究からその特徴を抽出した。また、抽出した育成方法の事例研究からその長所とわが国における適用可能性を抽出した。その際、自身の慶應義塾大学テニス部監督、ユニバーシアード日本代表男子コーチという自身の指導者としての立場も含めて抽出した。

第5章では、自身の経験から、選手の立場と指導者の立場の両側面からそれぞれの事例を踏まえての考察を行ったのち、第4章で明らかにした各選手と各育成システムそれぞれの事例比較を行った。

以上のことを踏まえて、本稿では(1)国内において世界トップ30入りする早熟型選手を育成することは不可能であること。(2)国内において世界トップ 100 入りする晩成型の選手を育成することは不可能ではないこと、また、100 位以内であれば、各種のサポートを得られつつ、スポンサーも獲得でき、プロテニス選手として 1,000 万円以上の収入を得られる選手としてのビジネスモデルが成り立つ中、(3)優秀なコーチの存在など一定の条件の下で、国内の大学において大器晩成型を育成することは可能であること の3点が明らかになった。